速で皮膚から腫瘍組織が盛り上がり出血を来たすことより頻回に部分切除が必要であった．また，内部の腫瘍に対しマイクロ波凝固療法も併用したこともあるが効果は不十分であった．現在，生後8か月になり，腫瘍の増大速度はかなり遅くなってきたと思われるが，依然胸壁に突出するように腫瘍が露出しており，出血を繰り返している．今後の治療として，腫瘍の増大が止まることを期待しつつ部分切除を繰り返し，ある時期に創の閉鎖を行なうことを予定している．しかし，腫瘍の増大が止まらずこの状況を打破できなければ，胸壁欠損は避けられないが腫瘍切除も考えなければならないと考えている．

### 3. 当院での網膜芽細胞腫の治療経験

関水　匡大，植木　英亮，村松友佳子
渡邊　修大，前田　尚子，後藤　雅彦
美濃和　茂，堀部　敬三
（国立病院機構名古屋医療センター　小児科）
久保田敏信
（同　眼科）

網膜芽細胞腫は主に乳幼児期に発症し，本邦では毎年80人前後が発症している．当院では2002年（平成14年）度より眼科と協力して網膜芽細胞腫の診療を行っている．治療は全身化学療法（主にVCR，VP16，CBDCA併用療法）と局所療法（主に経瞳孔温熱レーザー療法）であり，放射線外照射は行っていない．合計27人37眼で，17人が片眼性，10人が両眼性，家族歴を認めたのは両眼性の4人(2家系)であった．眼球外進展例はなかった．化学療法を施行したのは20人29眼で，3人4眼は現在治療中である．温存療法を終了した25眼は，国際分類ではgroup A 0眼，B 11眼，C 1眼，D 9眼，E 3眼で，各groupの眼球温存率はB 100%，C 100%，D 22.2%，E 0%であった．国際分類のDの温存率は諸報告同様不良であり，眼球内進展例に対する治療開発が必要であると考えられた．

### 4. Plasmacytoid dendritic cell lymphomaの3例

濱　麻人，高橋　義行，村松　秀城
西尾　信博，谷ヶ崎　博，小島　勢二
（名古屋大学大学院医学系研究科　小児科学）
中村　栄男
（同　高次医用科学）
伊藤　雅文
（名古屋第一赤十字病院　病理部）

【緒言】plasmacytoid dendritic cell (pDC) lymphomaはまれな疾患であり，高齢者に多く，予後不良である．小児例は6例の報告があるのみで，我が国からの報告はみられない．

【症例1】5歳男児．左上肢に皮下腫瘤を認めた．皮膚生検では大型異型細胞の浸潤を認め，CD4，CD56陽性であった．化学療法により寛解を得たが，治療終了後1か月で皮膚に再発した．骨髄でも芽球が増加し，芽球はCD4，CD56陽性でpDCに特徴的なCD123，BDCA-2陽性であった．

【症例2】9歳男児．背部に皮下腫瘤を認めた．皮膚生検では大型異型細胞の浸潤を認め，CD4，CDS6陽性であった．化学療法により寛解を得たが，治療終了後4か月で皮膚に再発した．

【症例3】6歳女児．右下肢に皮下腫瘤を認め，腫瘍はCD4，CD56，CD123，BDCA-2陽性であった．

【考察】自験例では寛解は得られるものの早期に再発しており，最適な治療方針を組み立てるにあたっては症例の蓄積が重要である．

### 5. 脊髄播種を来した小児gliomatosis cerebriの1例

林　重正，纐纈　直樹，竹内　裕喜
（公立陶生病院　脳神経外科）

Gliomatosis cerebri (GC)はWHO分類で由来不明の神経上皮性腫瘍に分類される稀な悪性脳腫瘍である．今回我々は，小児GC例が脊髄播種を来した症例を経験した．

症例は12歳女性．既往歴なし．入院8か月前から頭痛と学業成績低下が認められていた．欠神発作を起こし近医受診，左眼視力が失われており当院紹介された．

眼底所見で両側視神経乳頭萎縮を認めた．MRIではFLAIR imageでhigh intensityの造影効果のない境界不明瞭なびまん性病変が小脳全体に広



NII-Electronic Library Service